

当院回復期病棟における転倒事例の転倒・転落の状況分析  
～転倒カンファレンス導入からみえたもの～

○橋本 緑, 岡田真也, 水口卓哉, 岡田菜穂子, 江口潤子, 牛谷 剛, 見延 勉,  
安田一平, 船越 敦史, 深谷 淳, 五十嵐大二, 倉橋利成

医療法人 清仁会 水無瀬病院 リハビリテーション部

【目的】回復期病棟では、生活リハビリを行いADLを上げるという病棟特性上、転倒・転落は避けることのできない課題となっている。当院においても様々な予防策を講じてはいるものの、高齢者や認知症患者が多いということもあり、安全のためにADLを下げざるを得ない例も多く見られた。そこで今回ADLを下げることなく再転倒防止を図るため、転倒カンファレンス（以下転倒カンファ）を導入し、傾向を分析したので報告する。

【対象と方法】2016年3月～2016年12月の間に回復期病棟にて発生した転倒・転落患者を対象とし、転倒の発生した当日または翌日に看護師及び担当セラピストにて転倒カンファを実施した。必要時には転倒現場の状況確認も行った。転倒の生じた状況と検討内容を所定のシートに記入し、時間帯・場所・状況・転倒歴・アセスメントシート・FIMの6項目について集計、検討した。

【結果】転倒事例の7割が夜間に自室にて発生していることが分かった。また移乗時やベッドからの転落が6割を占め、入院後初回の転倒であったものが過半数を占めた。アセスメントシートのスコアやFIMにおいては一定の傾向は見られなかった。

【まとめと今後の課題】転倒発生時の時間帯・場所・状況に関しては一定の傾向があることが分かった。これらの要素を考慮し、多方面から患者を評価してADLを検討していくことが重要である。今後、転倒カンファ導入後に転倒件数が変化したかどうかとも検討していきたいと考える。